文化庁月報

No.508
平成23年 1 月号

CONTENTS

特集 **これからの芸術文化を担う人材の育成**

概要
近藤誠一文化庁長官と京滋地区芸術系大学事務局長との懇談会 …… 浅埜之博・4

事例紹介
地域協同教育ネットワーク・プログラム …… 門脇英純・6
次世代の芸術文化をリードする創造的人材の育成 …… 廣野貴夫・8
京都の嵯峨にある、芸術の大学 …… 古川　誠・10
芸術・デザイン・マンガのプロフェッショナルによる実践教育 …… 福岡正藏・12
生涯の“伴侶”からのラブレター　芸術系大学院の通信教育 …… 上村　博・14
グループ活動が得意な芸大生が生まれるカリキュラム …… 徳丸成人・15
地域の人々と歩む【キャンパスが美術館】 …… 橋詰英樹・16
京都国際学生映画祭「映画のまち・学生のまち京都」で次世代の映画文化を担う人材を育成 …… 西浦　明・18

連　載

鑑　文化芸術へのいざない　49・50
組踊の歴史と特徴（国立劇場おきなわ調査養成課）…… 20
「現代アート」ってどうでしょう？（野口玲一）…… 22

文化人の気魄　6
「墨はじき」に教えられて　十四代 今泉今右衛門（陶芸作家）…… 24

いきいきミュージアム　美術館・博物館事業レポート　106
新潟市歴史博物館（新潟県）…… 26

こどもの文化体験 46
舞台に咲く「花」（子どものための優れた舞台芸術体験事業）…… 27

祭り歳時記　伝承を支える人々　47
利賀のはつうま行事（富山県南砺市）…… 28

文化交流使の活動報告　74
メキシコ滞在あれこれ（和太鼓奏者・蓑輪敏泰）…… 29

著作権トピックス　5
著作権等登録制度と著作権が及ぶ範囲…… 30

言葉のＱ＆Ａ　10
依頼の仕方の問題…… 31

国立大学施設探訪　4
近代建築消滅都市仙台に残る東北大学の歴史的校舎群 …… 32

文化庁ニュース
国宝高松塚古墳壁画修理作業室の公開…… 33
文化財保護強調週間のロゴマーク募集に係る文化庁長官表彰 …… 34
みんなで守ろう文化財　第 57 回文化財防火デー …… 34
文化財保護法施行 60 周年記念フォーラム「みんなで支えよう文化財」…… 35
文化財の新指定（美術工芸品関係　2）…… 36
第７回文化庁映画週間　Here & There …… 38
「霞が関から文化力プロジェクト」東京藝術大学プロデュースミニコンサートの取組…… 40

イベント案内 41
新国立劇場スポットライト 45
２月の国立劇場 46
芸術文化振興基金ニュース 47

今月の表紙

今年の主役
撮影：岩崎　明

特集

これからの芸術文化を担う人材の育成

文化庁提言

現在、日本の文化芸術にかかる人材についてはさまざまな課題を抱えています。芸術家の国内での活躍の場が少なく海外流出も見られるといった事例のほか、文化芸術を支える専門人材の不足や養成体制に関する課題等が指摘されているところです。また、無形の文化財等においては、技術や技能が途絶えるおそれがあります。

文化審議会において、今後の文化芸術振興のための基本的な施策の在り方について検討を行っているところであり、平成22年6月27日に文化政策部会の審議経過が報告されました。報告書では、芸術家をはじめ文化芸術を創造し、支える人材を充実する観点から、以下の取組を進めるとされています。

◆ 新進芸術家の海外研修やその成果を還元する機会を充実したり、国内での研修機会を得られるようにしたりするほか、顕彰制度を拡充するなど、若手をはじめとする芸術家の育成に関する支援を充実する。

◆ 文化芸術活動や施設の運営を支える専門的人材の育成・活用に関する支援を充実する。

◆ 無形文化財や文化財を支える技術・技能の伝承者に対する支援を充実する。

◆ 文化芸術の振興に当たり、大学等の関係機関との連携を強化する。

文化審議会では引き続き、十分な審議を行っていきますが、特に若者の育成については、大学等の関係機関との意見交換の場を設けるなど、連携を強化する必要があります。

この度、京滋地区芸術系大学との懇談会を行いましたので、その模様と各大学等の取組事例を紹介します。

概要

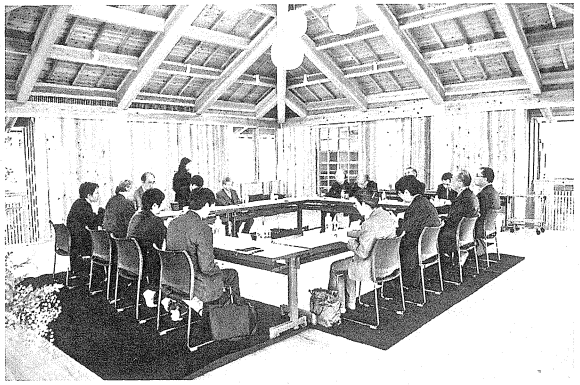
近藤誠一 文化庁長官と京滋地区芸術系大学事務局長との懇談会

京都造形芸術大学法人企画課長
浅埜 之博

平成22年11月2日、近藤誠一文化庁長官と京滋地区芸術系大学事務局長との懇談会が京都造形芸術大学において開催され、「これからの芸術文化を担う人材の育成」というテーマで活発な意見交換が行われました。懇談会には、大学コンソーシアム京都の加盟校のうち芸術系学部をもつ5校（大阪成蹊大学芸術学部、京都市立芸術大学、京都精華大学、京都造形芸術大学、成安造形大学）の事務局長らに加えて、大学コンソーシアム京都、京都市からも参加がありました。

最初に、社団法人京都産業会館の支援のもとに開催している学生デザイン作品展「いとへん展」、大学コンソーシアム京都が主催する「京都国際学生映画祭」、全国初の都市を挙げての学生祭典である「京都学生祭典」など、大学間連携による芸術文化の取組が紹介され、大学のまち・学生のまち京都の魅力について話し合われました。

その後、懇談はテーマである人材育成に移り、芸術系大学側からは「京滋地区の芸術系大学では、小・中学校の美術教育に対して芸術系大学が果たす役割や、次世代を担う子どもたちにとって何が必要なのかをテーマに話し合っており、先日も京都市教育委員会と連携協議会を開催した。芸術教育の意義は他者との違いの素晴らしさを感じることにあると思われるが、現在の子どもたちの多くは、正解が常に何処かにあり、その答えを探そうとする姿勢が身についてしまっている。一枚の絵を描かせても、どのように描けば良いのか、どうすればうまく描くことができるのかだけを追求してしまい、自分の感じたままを表現することや人と違う表現をすることに抵抗を感じてしまう子どもたちも多い。そのような学校教育を推進してきた大人たちの責任は大きいと感じている。今後、京滋地区の芸術系大学が連携をとり、小・中学校へ働きかけ、次世代を担う子どもたちに表現の大切さ、人とコミュニケーションすることの楽しさなどを伝えていきたい。」と考えが述べられました。



京都造形芸術大学　千秋堂にて

近藤長官からは、「JET※プログラムの講師たちとの意見交換でも、日本の子どもたちは、コミュニケーションを楽しむための手段として英語を使っていない、英語教育といえば、テストで良い点を採ることが目的となっているのではないかといった意見が多数出ていた。戦後の日本の教育において、そのような手法が必要だったかもしれないが、今の時代にはあまりにも合っていないと感じている。これからの教育は、どの科目においても個性を大切にし、多様性をもって子どもたちを指導していかなければならないと感じている小・中学校の教員は、多いと思う。ただ、現在の教育制度がそれについてきていないのも現実だと思う。芸術教育の大切さを伝える中で、一人ひとりが生きる力やどんな困難に直面しても、それまでの価値観と違う場面に接しても、それを乗り越えられる力を発揮できる子どもたちを育てることが出来れば、素晴らしい。」との話がありました。

さらに、芸術系大学から、「以前に行われた文化庁長官と芸術系大学学長との懇談会を再開し、大学における芸術教育の現状と今後の展開について各大学の考えをお聞きいただきたい。」と要望がだされました。近藤長官からは、「私が何らかの貢献ができるのであれば、ぜひ開催したい。また、学長との懇談だけではなく、来年京都で開催される国民文化祭に合わせて、ハーバード大学のサンデル教授が行っている白熱教室のようなかたちで、京滋地区の芸術系大学の学生たちとも話ができればとても嬉しい。文化には答えが無いだけに、それぞれが自分の考えをぶつけ合い、本音を聞いて刺激される、そのような場を設けることができれば楽しい。」と新たな提案もなされ、懇談会は閉会されました。

※ JETプログラム：「語学指導等を行う外国青年招致事業（The Japan Exchange and Teaching Programme）」の略称。外国語教育の充実と地域レベルの国際交流の進展を図ることをとおし、我が国と諸外国との相互理解の増進と我が国の地域の国際化の推進に資することを目的として、開始された。

事例紹介

地域協同教育ネットワーク・プログラム

大阪成蹊大学芸術学部教授／総合教育研究支援センター長
門脇　英純

大学が存立する地域社会に、保有する人材と施設を積極的に開放することで、ともに持続的な発展を図っていく共存共栄型のプログラムの開発とその提供は、時代の趨勢としてすでに自明化し、もはや「大学と社会」を考える上での〝常識〟になっているといえます。

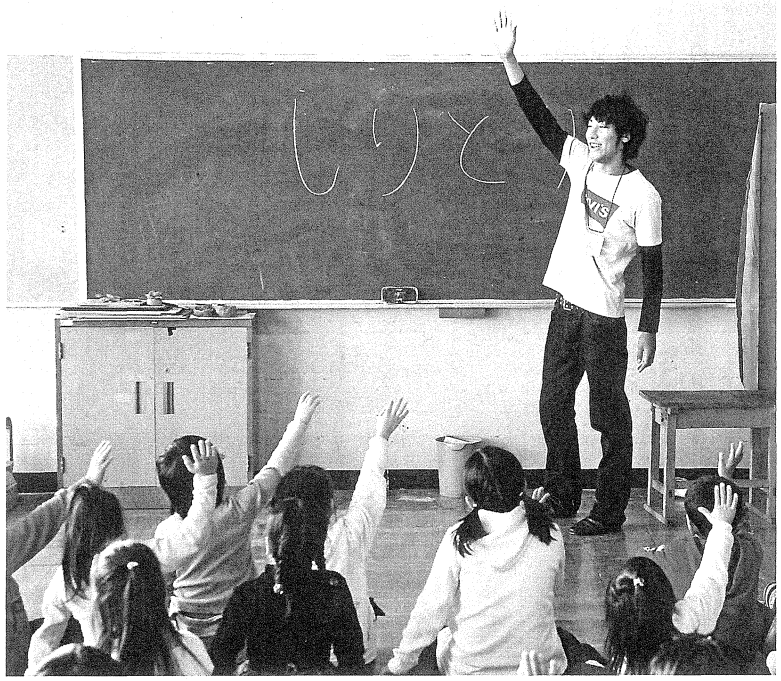
しかし近年、異なった角度から大学教育の在り方が話題になっています。特に、教養教育において習得させるべき内容をキャリア教育とリンクさせ、社会人として活躍できる実践力養成の成否が鋭く問われてきています。大学をとりまくこのような社会情勢に真摯に応答すべく、本学（学部）は平成20年度から「協同教育（Cooperative Education）」プログラムをスタートさせました。大学を軸とした地域の関係団体とのネットワークの中で、本学の活動に職業的・学術的に関心をもつ人たちとともに、学生が学んでいくプログラムで、学生全員が少なくとも1回は参画するボランティアを中心とした体験型カリキュラムをはじめ、多様な学習回路を通じて地域社会の活性化に貢献しようと取り組んでいます。また、実際に学生がキャンパス外の社会に大きく踏み出すことによって、自分以外の人（他者）や物事との出会いの場を自己発見の契機とする、つまり自分の手で自身を教育するという〝自己教育（Self-Education）〟を常に意識化させて演習活動を進めています。

〝生きた学び〟を促す「地域協同教育ネットワーク・プログラム」の実践は、学生たちが実社会（地域の子どもや大人）と向き合い、自己自身そして現代社会に対する課題意識を養っていくための、格好の切っ掛けづくりとなりました。また同時に、このプログラムを進めていく中で、本学（学部）の課題が明らかになりました。特に挙げられるのは、プログラム（授業）を他の社会教養系科目や専門教育系科目の中にどう位置づけ、最終的にどのような人材を育成していくかという教育課題です。大学は、実社会に最終的な接点がある教育機関として、学生たちのキャリア形成に責任をもつことが改めて指摘されている今日、もはや「社会人基礎力」の養成は喫緊の社会要請的な任務になっています。つまり、学生一人ひとりの学習課題を個別的・組織的にテーマ化し、既存のカリキュラムにおける各科目の関連性や系統性を整備していく必要性が、浮き彫りになったといえます。

以上のように、本プログラム（授業）では、啓発的な経験（Exploratory Experience）が学生にもたらされるよう鋭意努めてきましたが、「社会人基礎力」の養成という観点からは、体験型学習を知識・理論的な面から統合を果たす講義科目の再編成が求められます。さらには、フィールド活動を、皮相的な〝（一応）経験しました〟レベルから啓発的な経験に転換させるためにも、身体感覚（五感）をとおして得られる「気づき」を重視し、その獲得を可能にする実際的なサポート（方法）が、ガイド役としての授業担当者の実践的なスキル要件として鋭く問われてくると考えられます。近年、ほとんどの大学では学外での体験型教育プログラムの充実がいっそう図られる傾向にありますが、単なるイベントの企画・運営経験に終らせるのではなく、体系化されたカリキュラム展開と学生自身のフィールド体験学習における「気づき」獲得のサポートといった両面的な取組が、今後強く求められると考えられます。

本プログラムを通じて、学生は実際的な体験活動と自己省察を循環的に繰り返しながら、これからの社会活動に求められる人間性、知的態度、価値観、つまり①コミュニケーション能力（子ども理解を含む他者理解）、②問題発見能力（思考力）、③学習スキル（プレゼンテーション能力）等の習得に取り組み、主体的に自分をブラッシュ・アップすることになります。

以上のように、各プログラムの到達目標を学生に明示し、学生が自覚的に諸能力の獲得に努めることによって、最終的に、近未来の社会変化にも柔軟に対応できる知的態度という側面では「総合的な人間力（General-Human Competences）」の養成を、また一般社会に共通して求められる応用可能な基盤的能力という側面では「汎用的能力（Generic Skills）」の獲得を目指していきます。



地域協同ネットワーク・プログラム
ボランティア・スタディ3「すくすく教室」

事例紹介

次世代の芸術文化をリードする創造的人材の育成

京都市立芸術大学事務局長
廣野　貴夫

京都市立芸術大学（以下、京都芸大）におきましては、平成24年度からの公立大学法人化を契機として、今年度「京都市立芸術大学整備・改革基本計画」を策定し、教育研究の充実、学外連携などに取り組んでいます。

明治13年の建学以来130年にわたって、国内外の芸術界で活躍する優れた人材を輩出してきましたが、大学を取り巻く社会環境が大きく変化し、受験生の確保や教育研究の成果を地域や市民への還元することなど、京都芸大が担う役割を明確にし、市民への説明責任を果たしていくことが求められています。

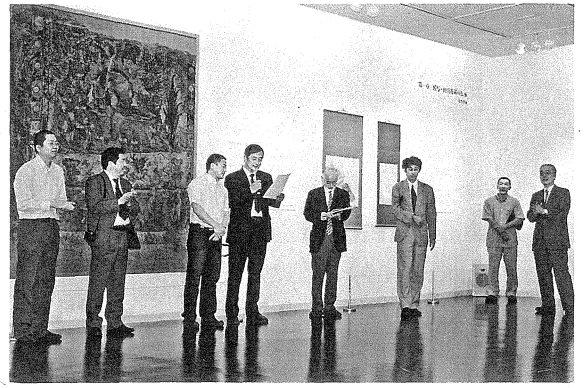
とりわけ、平成22年度は、創立130周年という節目の年であり、京都市美術館での「京都日本画の誕生」展や京都国立近代美術館での「生存のエシックス」展、京都コンサートホールでのベートーヴェンの「第9」やマーラーの「復活」、京都会館でのオペラ「椿姫」などの演奏会、日本伝統音楽研究センターにおける公開講座など、新たな発信ができたかと自負しております。

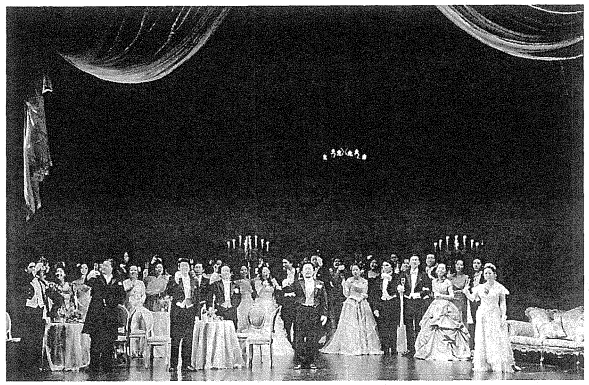
また、平成21年度から、デザイン専攻を中心として、大学コンソーシアム京都に参加する芸術系6大学（大阪成蹊大学、京都嵯峨芸術大学、京都精華大学、京都造形芸術大学、成安造形大学、京都市立芸術大学）による展覧会「いとへん展」を開催することができ、大学間連携や産学連携の推進に寄与することができ、芸術系大学コンソーシアムへの端緒となりました。とりわけ22年度には、その展覧会にあわせて実施したパネルディスカッション「表現教育と芸大のあり方」において、小中高教育と大学教育の連携の必要性の議論がなされ、これを契機とし、教育委員会と6芸術大学との連携協議会が発足し、各大学の役割など何ができるか議論していくこととしています。こうしたことは、また、本学の整備・改革基本計画の中においても、「芸術大学等との連携や小中高大連携の必要性」を記載し、充実に取り組んでいくこととしています。

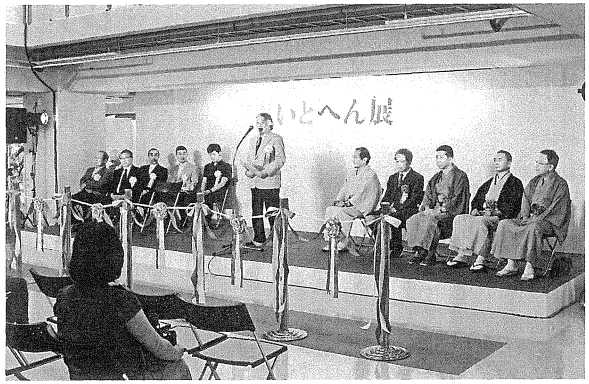
例えば、小中高校教育における芸術教育の現状に対する課題を共有し、知育教育・人間教育として、心豊かな人材の育成など、芸術教育の意義を市民に理解してもらうとともに、京都の文化芸術への裾野を広げるため、小中高校における出前授業などに取り組んできました。

平成22年度では、日本画専攻を中心に、出前授業の際に上村淳名誉教授によるお話を取り入れたり、敦煌壁画の技法を体験するなど、生徒に興味をおこさせるような取組を進めております。

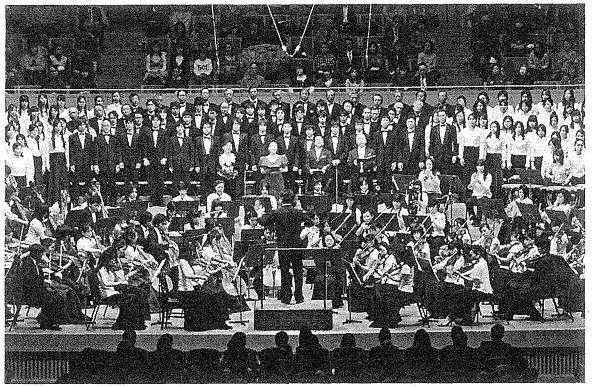
今後とも、歴史と伝統に培われた京都で、自由で独創的な研究とそれに基づく質の高い芸術教育を通じて、次世代の芸術文化をリードする創造的人材を育成していくよう努めてまいります。


「日本画をつなぐ」展オープニング


オペラ「椿姫」



学生デザイン作品「いとへん展」オープニング


第133回定期演奏会

事例紹介

京都の嵯峨にある、芸術の大学

京都嵯峨芸術大学広報室
古川　誠

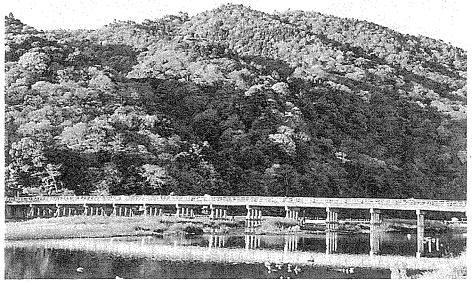
1971年、嵯峨美術短期大学として開学した本学は、2001年、京都嵯峨芸術大学を開学し、これまでの嵯峨美術短期大学を京都嵯峨芸術大学短期大学部に名称を変更。そして2005年には京都嵯峨芸術大学大学院を開設しました。そのような本学は、京都の嵯峨・嵐山にある大覚寺（旧嵯峨御所大覚寺門跡）を母体とした学校法人大覚寺学園として、2011年に学園創立40周年を迎えます。平安時代前期、当時の嵯峨天皇の離宮（別荘地）として建てられた嵯峨離宮こそが大覚寺の前身であり、京都の嵯峨という地名は、唐の都・長安近くの観光地、嵯峨山を参考にして名づけられたと言われています。そのような歴史と文化を兼ね備え、世界中から観光客が集まる名所に位置する京都嵯峨芸術大学。ゆったりとした時間が流れる嵯峨・嵐山の地で、学生一人ひとりと向き合う教育を行っています。

京都嵯峨芸術大学　外観

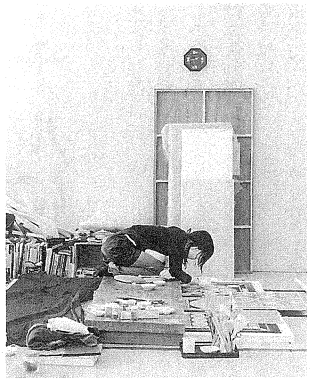
本学の特色ある教育事例としては、まず芸術学部造形学科の日本画分野が挙げられます。中でも古画研究は文化財修復を目的に日本画や中国画の模写などをとおして自身の技術を高めるだけでなく、最新の分析機器を用いながら科学的見地からも研究を実施し、古画に対する研鑽を積んでいきます。実際、キトラ古墳をはじめとするさまざまな場所で、古画を学んだ卒業生たちが活躍しています。また本学では芸術学部造形学科内での油彩表現のクラス名称を洋画ではなく油画と表記しています。これはいわゆる明治期に西欧からもたらされた西洋技法での様式を単に受け入れた日本の美術教育を追及するだけではなく、広い可能性をもった油彩画の発展を願いつつ、古典にとらわれない表現の多様性をより拡大・検証していこうとする本学の教育意志を表したものと言えるでしょう。一方、2001年の京都嵯峨芸術大学開学時には日本初の観光デザイン学科を開設しました。観光デザイン学科では、大覚寺にある日本最古の人工池・大沢の池を平安時代の美しい姿へもどし再生する修復プロジェクト「ソウギョバスターズ」をはじめ、大覚寺や地域の人々も含めたフィールドワークを重ねながら、歴史と伝統が息づく京都の街と文化を検証する作業を実践してきました。この観光デザインは、2011年の学部学科再編後もデザイン学科の一領域として継続し、引き続き注目を集めるでしょう。同じく2011年から本学の短期大学部ではマンガ分野が立ち上がります。今や日本を代表する文化として世界から愛されているマンガを考察しながら、画力やストーリー力を鍛え、マンガ表現技法とシナリオ構成を学びます。

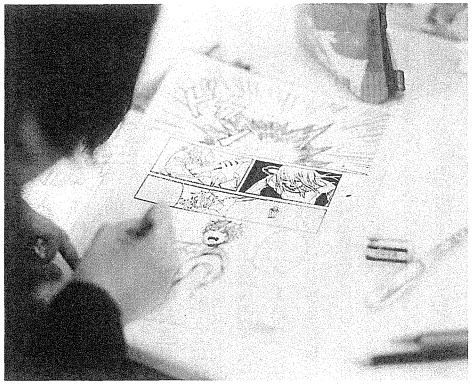
本学校舎の屋上からは嵐山をはじめ、桂川にかかる渡月橋や百人一首にも読まれた小倉山、さらに五山送り火の鳥居形が間近に見え、東側には、遠く京都タワーや比叡山、五山送り火の大文字までが見渡せます。

このように、四季を感じ、日本情緒の機微に触れることができるこの地は、感じ、考え、表現を生み出す、ものづくりのための最良の環境に恵まれている地と言えるでしょう。豊かな伝統を素直に学ぶ姿勢、革新的な表現を発信する姿勢、個人と個人がダイレクトに交わすコミュニケーション。そうした在り方を今に受け継ぐ場所、それが京都嵯峨芸術大学です。


渡月橋

京都嵯峨芸術大学　油画分野アトリエ風景


京都嵯峨芸術大学　日本画分野アトリエ風景


京都嵯峨芸術大学短期大学部　マンガ分野アトリエ風景

事例紹介

芸術・デザイン・マンガのプロフェッショナルによる実践教育

京都精華大学学長室長
福岡　正藏

京都には、綴織、京友禅、組紐、唐紙、陶磁器、京人形、竹工芸など、たくさんの伝統工芸や伝統産業が古くから根付いています。京都精華大学は、その工房や作業現場で学生が体験的に学ぶ「学外実習」という集中授業を、1980年から30年間実施しています。学生たちは、職人さんやデザイナーの方から直に指導を受けることで、プロの仕事の水準の高さ、精緻さを目のあたりにし、匠の技に驚愕します。伝統の重みを肌で感じ取った学生の中には、卒業後、伝統工芸・産業の世界に入り、その技を継承する者も少なくありません。

京都精華大学は1968年、洛北の地に設立されました。現在は、芸術、デザイン、マンガ、人文の4領域の学部と大学院で構成されています。

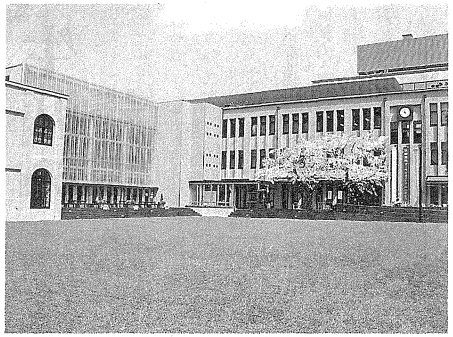
芸術学部には3学科が置かれ、洋画、日本画、立体造形、陶芸、テキスタイル、版画、映像の7コース。数多くの素材にふれ、伝統芸術からデジタル表現まで、さまざまな技法やメディアに挑戦できるよう実技中心のカリキュラムを編成しています。異なるジャンルとの融合やコラボレーションも盛んで、例えば洋画コースで写真を扱う、版画コースでCGを制作する、テキスタイルコースで金属や紙を使うことも珍しくありません。

芸術学部の制作環境・施設は、全国の芸術系大学でもトップレベルの充実ぶりです。一人ひとりにゆったりと割り当てられる制作スペース、最先端の映像編集室やCGルーム、大規模な作品も焼ける陶芸の窯。写生のモデルになる鹿や孔雀もキャンパス内で飼育しています。場所や時間が制約されるような環境では、新しいアイデアや表現は生まれにくいものです。腰をすえて、思う存分制作に打ち込むことができる実習環境を確保しています。

実習室では、授業が終わった後も、学生と教員が作品を挟んで熱心に意見を交わします。現役の作家である教員が一人ひとりに向き合い、学生はいつでも相談できる、といった個人指導体制を整えています。ここでは、学生は一方的に教えられる存在ではなく、一人の作家として扱われます。教員と学生という作家どうしが刺激し合うことで新しい発想が生まれ、表現の幅が広がると考えるからです。こうした一対一の濃密な関係は、京都精華大学の人材育成の基本姿勢です。

デザイン学部でもその姿勢は同じですが、テクノロジーが急速に発展し日々新しい表現が生み出されているデザインの現場では、最先端を知るプロから直接学ぶことがなにより重要となりますから、教員はすべて第一線の現役クリエイターが務めています。客員教授陣には、日本のグラフィックデザインの第一人者である浅葉克己をはじめ、山本容子、伊藤ガビンなど、日本の新しいデザインを切り開いてきたプロフェッショナルの発想や技術が、学生に対して強烈で新鮮な刺激を与えます。「プロが、次代のプロを育てる」という人材育成の考え方が、デザイン学部の教育コンセプトです。

伝統工芸の現場で体験的に学ぶ「学外実習」


京都の街の中心地，烏丸御池交差点にある「京都国際マンガミュージアム」

デザイン学部は3学科のもと、グラフィックデザイン、イラストレーション、デジタルクリエイション、プロダクトコミュニケーション、ライフクリエイション、建築の6コースを設置しています。近年多様化しつつあるデザイン表現に対応するため、コースを超えたコラボレーションを意図的に仕掛け、一つの領域にとどまらない実践的な学びをつくり出しています。

教室内で課題に取り組むだけでなく、各国のメーカーなどが主催するコンペへの出品、企業や自治体の依頼を受けたデザイン制作、歴史的な建築物の調査や修復など、実際の仕事を体験することによって、クリエイターとしての能力やセンスを磨きます。

こうした実践的な教育は、マンガ学部でも展開されています。

日本のマンガ・アニメーションが世界的に注目されているのは周知のとおりです。この新たな芸術・エンタテインメント表現を総合的に学ぶ場をつくるために、全国で初めてのマンガ学部を2006年に設置しました。

マンガ学部には四つのコースを設置しています。批評とユーモアを1枚の絵に込めるカートゥーンコース、プロのマンガ家を目指すストーリーマンガコース、動画表現の可能性を追究するアニメーションコース、編集・原作・批評の視点でマンガ文化を掘り下げるマンガプロデュースコース。これらのコースが協働して、1冊のマンガ誌をつくり上げるコラボレーションなど、マンガ教育の先駆者として先進的な授業を展開しています。在学中に作品を発表する機会も多く、企業や自治体の広報誌制作、マンガ家のアシスタント体験、国際展覧会への出品も行います。

マンガ学部の教員には、各分野をリードし、時代を築いてきたトップランナーが揃っています。国内外の著名なカートゥーニスト。新しい表現分野を切りひらいたコミック作家。日本アニメーションの歴史をつくってきた監督やクリエイター。人気コミック誌の元編集長をはじめ、編集・原作・批評のエキスパートもいます。マンガ、アニメーション業界の第一人者から直接学ぶ経験は、学生の学びにとってなにより価値があります。

京都精華大学が京都市と共同運営している「京都国際マンガミュージアム」は、いまでは京都の観光名所の一つになっています。マンガ学部とともに全国に知られるようになり、作品制作の依頼が数多く寄せられ、さまざまな産官学連携プロジェクトが同時並行で実施されています。マンガ学部の学生や卒業生は、企業や自治体の広報誌やパンフレットの作画を担当するなど、プロさながらの実践体験を積んでいます。最近では、有望な新しい描き手を探す外国の出版社や、コンテンツビジネスを展開したい企業からの問い合わせも増えています。

事例紹介

生涯の〝伴侶〟からのラブレター 芸術系大学院の通信教育

京都造形芸術大学通信教育部長補佐・芸術学科科長
上村　博

京都造形芸術大学では、２００７年度に通信制の「芸術環境専攻」という修士課程を開設しました。学部に続き、大学院でも芸術の高等教育としては初めての通信制です。初めてというだけでなく、モノや技術の役割が大きなウェイトを占める芸術大学では異例のことです。やがて修了する3期生を含めると２００名ほどを送り出してきました。

「芸術環境」というと、芸術とエコロジーを扱っているようにも思われるかもしれません。しかし、この名前はエコロジーというよりも、地域の文化性や個々の学生の生活環境の創出というニュアンスでつけられています。実際、芸術活動も今日では価値ある多様性が求められています。芸術の高等教育は、たとえかつてはギリシャ・ローマに範を求めるような西欧的アカデミズムに倣った形で導入されたとしても、いまや新たな問題を引き受けざるを得ません。すなわち、21世紀の日本で、また国内外のさまざまな環境下で、芸術が一体何をなしうるのか、という根本的な問題です。学生が居住地や職業を選ばず在籍できる通信制では、なおのこと肝要な問題です。そのため本学では、既成のステイタスに依拠した作品制作ということではなく、個人の想像力や地域の文化力の育成という観点から芸術をとらえ直そうとして、「芸術環境」専攻を作りました。

そのような意味での芸術環境を育てるためには、一つには専門的技能に長けた芸術家やデザイナーを養成することが必要です。しかしそれだけでは十分ではありません。専門家は確かに重要ですが、芸術は一部の作り手の側だけがかかわるのではなく、万人にとってだいじです。そしてまた、美術館でモネの《睡蓮》を鑑賞したり、歌舞伎座で『仮名手本忠臣蔵』を観たりすることばかりが芸術ではありません。食育を実践する、地域の文化資産を守り伝える。そういったことも、身の回りの環境を創出する行為であって、立派な芸術です。たとえ他の職業に従事していても、また家事や育児から手を離せなくても、どこかでそうした営みに携わっていられたら、どれほど自他の生活が充実することでしょうか。

芸術大学が「不景気だから就職難だ」とか「文化行政はフランスなみにもっと金を出せ」とか言っていてはダメです。言霊の幸わう国は芸術の幸わう国です。芸術や芸術大学はこれから第二のプロフェッションとして、社会人のパートナーとして、大いに活躍せねばなりません。本学の大学院も、さらにもう一歩を進めて、ほんとうの意味での人生の伴侶たる学士課程後postgraduate教育を築く時期に来ているように思われます。

事例紹介

グループ活動が得意な芸大生が生まれるカリキュラム

京都造形芸術大学教学事務室教学支援グループグループヘッド
徳丸　成人

夏休みの期間にもかかわらず、連日学生たちが集まり、ミーティングを行ないあれやこれやと議論をしている。ミーティングが終われば、チームにわかれそれぞれが担当する仕事に取り掛かる。よく見れば学年も学科もバラバラで、作業指示を出しているのは1年生だったりする。これは本学で年間30本以上実施されている「プロジェクト演習科目」での風景。

また9月のある夜に、二十数台の巨大な〝ねぶた〟が次々と点灯され、学内が一気にお祭り気分に満たされる。そこには1年生全員の姿がある。2週間にわたって異なる学科の学生どうしが制作を進めたねぶたの形はさまざまだが、光に照らし出された学生たちの表情はどれも満足げで、あたり一面は大きな一体感で包まれている。これは、夏の集中授業として1年生全員が履修する「グループワークショップ科目」という授業のクライマックス。この二つの授業には「プロジェクト型グループ活動」であるという共通点があります。

本学は２００７年度に、大幅なカリキュラム改革を行い、芸術教養課程では、プロジェクト型グループ活動の手法を取り入れた科目を新たに組み入れました。「芸術を社会に活かすことのできる人材の育成」を教育の目的と定め、この達成の為の代表的なカリキュラムが、ねぶた制作を行う「グループワークショップ科目」と、実社会での課題解決を行う「プロジェクト演習科目」です。

「グループワークショップ科目」では、芸術学部10学科の学生を完全にシャッフルし、新たに約30名のクラスに編成しなおし、クラス毎に「ねぶた」という一つの作品を作り上げていく過程で、他者と関わりコミュニケーションすることの大切さに学生自らが気付くことを目的としています。同時にグループで活動を行う楽しさや充実感を体感する機会にもなっています。「プロジェクト演習科目」では、産官学連携であることをカリキュラムの基本に置き、企業や町といった実社会における課題を解決することを目的としたカリキュラムになっています。その課題に対して、学年・学科を限定せずに公募でプロジェクトメンバーを公募し、さまざまな能力や価値観をもった学生が集う仕組みを採用しています。社会人とのかかわりも含め、グループ活動の難しさを学ぶ場でもあります。また両科目ともリーダー、副リーダー、役割を分担した小グループの編成など、実社会における組織体制をイメージして活動を進めています。専門教育においてもプロジェクト型授業は数多く取り入れられており、学生たちは、卒業までに実にさまざまなグループ活動を経験することになり、美術系大学に限らず、本学の教育の大きな特色となっています。

事例紹介

地域の人々と歩む【キャンパスが美術館】

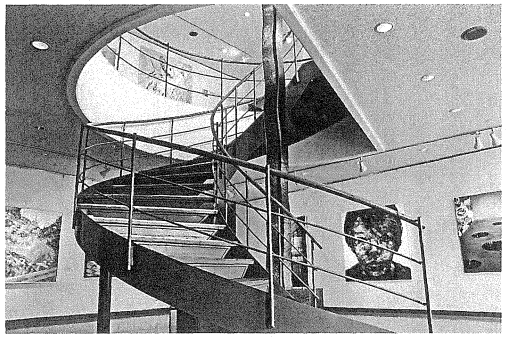
成安造形大学入学広報部門主管
橋詰　英樹

成安造形大学では昨年（平成22年）10月に、経営母体である学校法人京都成安学園が創立90周年を迎えたのを機に、回遊式美術館として【キャンパスが美術館】を開館しました。

本大学はその建学の精神のもと、90年にわたる永い歴史の歩みの中で1993（平成5）年に、滋賀県大津市の仰木の里に開学しました。「芸術による社会への貢献」を基本理念として、地域に開かれ、人の和を大切にし、一人ひとりが自己の使命を追求し、全うし続けることができる人材を育成する大学を目指してきました。

今日、さまざまな面で価値観が多様化する中、芸術大学が果たしていく役割とは何かを根源的に問い直す必要性が増してきました。この観点から、本大学における芸術の教育研究の新たな可能性を積極的に模索し、「芸術による社会への貢献」をさらに具現化するため、成安造形大学【キャンパスが美術館】を開館するに至りました。

これはキャンパス全体を回遊式の美術館とし、琵琶湖と霊峰比叡山・雄大な比良山系を借景し、さまざまな規模のギャラリースペースを12か所開設し、活発な芸術活動の発信基地として機能させています。あわせて、ストリート・ファニチャーの設置やグランドの芝生化、植樹などを施して、教育研究の場にふさわしい快適空間を目指しています。



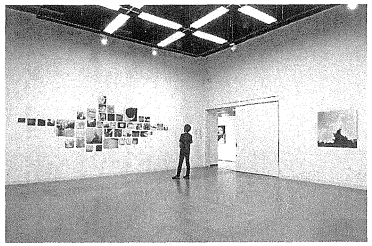
フロントギャラリー：本館棟の玄関口にある，1階と2階をらせん階段でつなげる開放的な空間

メディアギャラリー：外から鑑賞できるギャラリー，主にメディアデザイン系作品を企画展示する

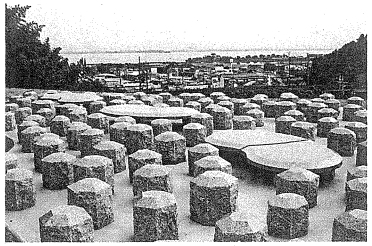
この美術館では、学生や卒業生たちの作品発表や、地域で開催された意欲的な展覧会の巡回、新進気鋭のアーティストのレクチャーやワークショップなど、広く細やかなネットワークを活かして、学生や地域に開かれ、持続可能な芸術活動を展開します。

12か所のギャラリースペースのうち、「カフェテリア『結』紀伊國屋 成安ミュージアムショップ」は、本大学の住環境デザインを専攻する学生たちが中心となり、平成16年に完成させたカフェテリアです。眼下に琵琶湖を望む本大学の一画に建築面積約304㎡、木造平屋建てのカフェテリアを自力建設（セルフビルド）したものです。ただ建物をつくるのではなく、学生を主体に教職員も一致団結して自力で建設することで、人々の交流を生み出す「広場」になることを目指しました。優れた地域の技に学びながら、近江（滋賀県内）産の間伐材・土・瓦・稲藁など、地域の素材を活用しました。そのカフェテリアの中に、ミュージアムショップをオープンし、本大学のオリジナルグッズ、展覧会関連の書籍・作品集、卒業生の作品などを販売するショップ&カフェとしています。単なる飲食のための場ではなく、地域の無農薬食材を使ったメニュー構成はもちろん、生産者との交流まで視野に入れた、いわゆるスローフードの実践を通じて食文化を見直すための場、地域とつながり環境に対する意識を高めるための場です。学生・教職員・地域住民の憩いの場であると同時に、地域に開かれた情報交換の場となっています。

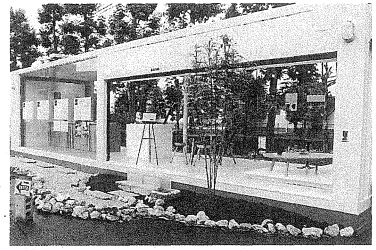
このような多彩な取組をとおして、この【キャンパスが美術館】が架け橋となり、地域の皆さまと学生・大学がつながり、学生一人ひとりの学びに寄与しながら、地域社会の活性化に資するものでありたいと願っています。【キャンパスが美術館】は、成安造形大学が運営する次世代の美術館として、地域の皆さまとともに歩める「芸術創造の場」となることを念願しています。



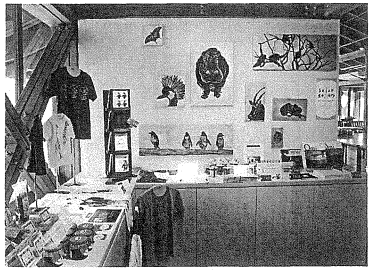
ギャラリーアートサイト：学内外の多彩な企画展や特別展などをとおして，芸術の可能性を社会に発信していくメインギャラリー



ガーデンミュージアム：野外スペースとして本学教員の作品を恒久設置，琵琶湖が一望できる素晴らしいロケーションと呼応する



BSギャラリー：コンテナをギャラリーに仕立て，学生が自由に発表できる展示空間，スクールバスの停留所（Bus Stop）に位置する



カフェテリア「結」紀伊國屋 成安ミュージアムショップ：本学オリジナルグッズ・展覧会関連の書籍・作品集などを販売するショップ＆カフェ

事例紹介

京都国際学生映画祭「映画のまち・学生のまち京都」で次世代の映画文化を担う人材を育成

公益財団法人大学コンソーシアム京都事務局長
西浦　明

京都国際学生映画祭は、京都を中心とした大学・短期大学・専修学校の学生が企画運営を行う、日本で最大規模の国際学生映画祭です。１９９７年に開催された第1回京都映画祭の学生部門が起源となっており、現在は主催を公益財団法人大学コンソーシアム京都として平成22年度で第13回を迎えます。２００３年度より文化庁の支援をいただき、２００９年度からは芸術文化振興基金の助成を受けて運営しています。

京都は日本映画黎明期の文化遺産を現在も継承する「映画のまち」であり、人口の1割を学生が占める「学生のまち」でもあります。その京都のまちで、学生が企画運営をする国際映画祭を行うことには、映像を制作する学生の才能の発掘と養成、上映をプロデュース・マネジメントする人材の育成、映画を通じた国際交流の機会の創出の三つの目的があります。

まず一つ目に挙げられる映像を制作する学生の才能の発掘と養成についてですが、本映画祭では、メインプログラムに世界中の学生の自主制作映画のコンペティションを継続して行ってきています。これまでに３３００本を超える作品が世界各国から応募され、多くの入選監督が京都で行われる授賞式に参加してきました。２００７年度にグランプリを受賞した小林達夫監督（早稲田大学川口芸術学校２００６年卒）は、その際の最終審査員であった渡辺あや氏（脚本家）との出会いがきっかけとなり、渡辺あや氏が脚本を手掛けた『カントリーガール』を制作するなど、その後の活躍にもつながっています。

そして二つ目の目的である、上映をプロデュース・マネジメントする人材の育成についてです。本映画祭では、主催である大学コンソーシアム京都事務局や、京都国際学生映画祭企画検討委員会（大学教員や映画界の有識者によって構成）のサポートを得ながら、コンペティションの募集や予備審査、上映プログラムの作成から、広報や協賛活動まで、すべて学生実行委員が行います。正課で映画やメディア、デザイン、マネジメント等について学んでいる学生の実践の場として定着してきており、卒業後に映画・映像業界で活躍するものもあらわれています。

そして最後に、映画を通じた国際交流の機会の創出です。コンペティションプログラムでは、日本全国はもとより、世界中から入選監督が来場します。自らの作品の上映時や授賞式時には、自らの作品の制作のねらいや背景、自国での映画文化について語ります。他の入選監督や観客との間で意見交換が行われることで、異文化交流の機会となり得ています。２００９年度においては、12名の入選監督中5名が海外からの応募で、韓国、オーストリア、ドイツの監督が実際に来場され、国境を越えた交流が実現しました。

２０１０年度の本映画祭では、11月27日から12月3日は京都シネマにてコンペティションプログラム、特別企画、連携企画を、12月4日は池坊短期大学こころホールにて授賞式を行いました。特別企画では、小林達夫監督の『カントリーガール』上映企画や、関西で映像制作を学ぶ学生作品の特集上映・トークショーなどを、また連携企画では、世界で最も古い歴史をもつ国際短編映画祭であるオーバーハウゼン国際短編映画祭や、東京学生映画祭、京都府の高校生との連携企画など、多岐にわたるプログラムを実施しました。

前述の三つの目的の達成を目指しながら、今後も、「映画のまち・学生のまち京都」から、学生の育成をとおして映画文化を醸成し、世界に向けて発信する取組を進めていきたいと思います。

第12回京都国際学生映画祭授賞式

第12回京都国際学生映画祭　開会式特別企画

第12回京都国際学生映画祭　徹底討論

●2月号予告

◆特集◆

新しくなった「常用漢字表」

【文化庁提言】
国語施策としての「常用漢字表」

【巻頭言】
「常用漢字表」改定の意義

【座談会】
「常用漢字表」をめぐって

【告示の概要】
新しい「常用漢字表」の概要

◆連載◆

【鑑 文化芸術へのいざない】
国立美術館の情報発信（国立美術館）
特別展覧会「法然とその時代の人々」の紹介（京都国立博物館）

【文化人の気魄】
小野大輔・声優

【いきいきミュージアム 美術館・博物館事業レポート】
京都市美術館

【こどもの文化体験】
あしたの劇場―座・高円寺の取組―（杉並区立杉並芸術会館「座・高円寺」）

【日本の伝統美と技を守る人々】
重要無形文化財「蒔絵」保持者・大西煎

【文化交流使の活動報告】
落語家・笑福亭銀瓶

【伝建地区を見守る人々 伝建歳時記】
平成22年度伝統的建造物群保護行政研修会

【言葉のQ&A】
「マニュアル敬語」の問題

【国立大学施設探訪 ～近代の記憶 そして未来へ～】
岡倉天心遺跡と六角堂

など

◆文化庁ニュース◆
文化財の新指定　美術工芸品関係3
京都国際漫画ミュージアム開館4年を迎えて
霞が関文化力イベント告知

など

編集後記

あけましておめでとうございます。今月の特集は11月に行われた芸術系大学と長官との懇談会をとりあげました。若者のパワーは日本の芸術文化を発展させていくためには必要不可欠だと思います。京都に引き続き、12月には東京にて芸術系大学とのシンポジウム「豊かな感性　強い日本へ」を開催しました。芸術分野の専門家育成の役割を担っている芸術系大学が文化庁、文化芸術団体、地域社会等と連携・協力を図り、人材育成を促進することに関し、パネラーや参加者の皆様から多くのご意見と提案をいただき、活発な意見交換を行うことが出来ました。今後も大学とは連携して施策の充実に努めていきます。

表紙のトップバッターは今年主役のうさぎさんです。私、今年は年男ですのでうさぎらしく躍動感あふれる勢いで頑張っていきたいと思います。本年も文化庁月報をご愛顧いただけると幸いです。（政策課員）

美術館・博物館チケットプレゼント

今月号の展覧会等へのチケットプレゼントは，

A　東京国立博物館「仏教伝来の道平山郁夫と文化財保護」　2組（ペア）

B　奈良文化財研究所飛鳥資料館「飛鳥の考古学2010」　2組（ペア）

C　京都国立近代美術館「パウル・クレー展」　5組（ペア）

です。ご希望の方はアンケートハガキのチケット応募欄に必要事項をご記入のうえ，1月25日（火）までにご投函ください（当日消印有効）。

＊チケット発送をもって当選発表にかえさせていただきます。

文化庁では，ホームページで，文化庁に関する情報を幅広く提供しています。ご意見，文化庁月報の感想などを，ホームページのご意見欄へお寄せください。

●ホームページアドレス●
http://www.bunka.go.jp

文化庁月報　1月号（通巻508）

平成23年1月25日印刷・発行

編集――文化庁
〒100-8959　東京都千代田区霞が関3-2-2

発行――株式会社 ぎょうせい
本社　〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-12
本部　〒136-8575 東京都江東区新木場1-18-11
電話　編集　03-6892-6527
販売　03-6892-6666
フリーコール　0120-953-431
URL：http://gyosei.jp

印刷所―ぎょうせいデジタル株式会社

●本誌の掲載のうち，意見にわたる部分については，筆者個人の見解であることをお断りいたします。

定価540円　本体514円
年間購読料6,480円
本誌のご購読のお申し込みは，直接弊社の本・支社，あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先
（株）ぎょうせい出版事業部広告担当
電話 03-6892-6589（ダイヤルイン）
2011 Printed in Japan　ISSN 0916-9849

本誌は本文に再生紙・大豆油インキを使用しております。